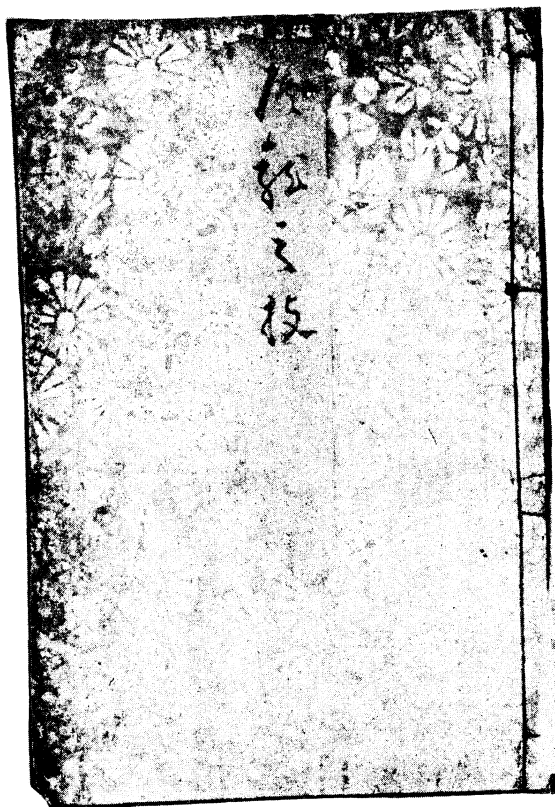




輕  
來  
觀  
句  
深



屠龍之技序

輕舉道人。誹諧

十七字の詠を善

くし。目に觸れ

心に感ずる者。

皆之を言に發

す。其の發する

所の者。皆獨

笑獨泣獨喜獨

悲の成す所な

り。而も人の之

を聞く者も亦我

と同じく笑ふ耶

泣く耶喜ぶ耶悲

屠龍之技序

輕舉道人。善誹諧十七字

之詠。觸於目。感於心者。皆

發之於言。其所發者。皆

獨笑。獨泣。獨喜。獨悲。之

所成也。而不知人之聞之者。

しむ耶を知らず。  
唯其の言ふ所を  
言ひ。其の發す  
る所を發する耳。  
道人嘗て自ら謂  
つて曰はく。誹  
諧體なる者は。  
唐詩に昉まる。  
而して和歌之に  
效ふ。今の十七  
詠は。蓋し其の  
餘流なり。故に其  
の言雅俗を論ぜ  
ず。或は之に雜

二与我國笑耶泣耶喜  
耶悲耶。唯言其所言。  
發其所發耳。道人  
嘗自謂曰。俳諧體者。昉於  
唐詩。而和歌效之。今十七  
詠。蓋其餘流也。故不

ふるに土語方言  
鄙俚の辭を以て  
す。又何の門風  
かこれ有らん。  
諺に云ふ。言ふ  
可くして言はざ  
れば則ち腹彭亨  
す。吾は則ち其  
の言ふ可きを言  
ひ。其の發す可  
きを發する而已  
と。道人は風流  
の巨魁にして其  
の髓を得たりと

言不論雅俗。或雜之。出  
語方々。鄙俚之辭。又何  
門風之有。諺云。可言而  
不之。則腹彭亨。吾豈  
言下之。而之。發其可發  
而已。道人。其風流。

謂ふ可し。因つて其首に題す。

文化九年

壬申十月

江戸鵬齋興

印

巨魁は其髓矣。因つて  
一首。

文化九年壬申十月

江戸鵬齋興



こがねのこま

うぐひすは鳴ともかたし腰互  
から傘のほねのたくみも柳哉  
筑紫の山の戸奈瀬にをつるやなぎ哉  
うめが香や爰の巨燵も周防どの  
かげろふや野馬の耳の動く度  
ゆめに見し梅や障子の影ぼろし  
芹喰ふて翼の軽き小鴨かな  
雛よりもかしづく人のひみなかな  
花ひと木鞍置馬を蔽しけり

傾廊

夜さくらや笏挑灯の鼻の穴  
芋の實の四もたらでや暮遅し

讃歌書

鶯の身をさかさまに初音どん  
かわら焼く松のにほひや春の雨  
花びらの山を動すさくらかな

牛ほどの蟻見付たり桃のゑだ  
蝶くや獅くのねむりの上を飛  
衆徒よ兒木葉天狗よ山ざくら  
連翹の苦喰ふかかわら鶺鴒  
鳥追の昔し相様やうめに鳥

三月盡

箒木の拾尋る晦日かな  
悼米翁老君  
聴き人も耳なし山や呼子鳥

舟行

船頭も象と成けり夏まつり  
ながれゆく椎木屋舗ほとゝぎす  
無同刺髪しける時

よし野よく櫻ん坊の天窓かな  
爐に寄ればよらるゝ夜也杜宇  
守る人に枕かそふよ瓜ばたけ  
居眠をりつばにさする扇かな  
一樹の蔭他生の縁ぞ心太

ほとゝぎすこれを喰ふか栗の花  
飛ぶ蝶を喰んとしたる牡丹かな  
わか竹の弓にうたるゝそだち哉  
郭公たゞ有明のかゞみたて  
畫中に入梅のしるしやほとゝぎす

達摩の讃

石菖や尻も腐らず石のうへ  
脱かへて花見虱に別れけり  
近付の森のあたりやほとゝぎす  
匡衡が壁をのづから五月あめ  
紫陽花や硝子吹きが椽の先  
間暑し舟にもうごくあふぎ哉  
としぐや御被に捨る多葉粉入  
すとしさは家隆の歌のしるし也

かぢのおと

星一ツ残して落る花火かな  
生蛸や納屋が柱の菜萵俗

明星や沖から戻る鴈の行  
あゝ欠び唐土(土)迄も秋の暮

少年行

飛ぶ駕や時雨来る夜の膝頭  
こがらしや明は木の柵園の竹  
河豚喰た日はふぐゝうた心かな

青樓

此年も狐舞せて越へにけり  
繪馬かきやくれゆくとしの走筆

遊べ春梅の鼻毛の延次第  
余處になき箸紙賣りや梅の紋

遠望

散る花を汲とも見へつ菌柄杓  
車ほど舟押す人や汐干がた

ほとゝぎす手燭にくらき夜の空

空懸明月待君王

今上る客は化物ほとゝぎす  
型も又こゆる暑さや雲の峯

浅草の富士詣に

これよりして御馬がへしや羽織不二  
すげ笠の紐ゆふぐれや夏祓

七里濱にて

浪に立人も馬鹿鳥磯の秋  
かひ巻もとられし音の野分哉

後朝

湯豆腐のあわたしき今朝の霜  
出山寺に晋子の發句碑たつと  
て

草莖の今に残るや人の口  
告わたる木綿付駕や年の開

をさがりの雫苦むや梅若し  
張子屋も梅は咲たり豆達摩

花街

松は皆人に植たる二日かな  
青柳やいなりの額の女文字

春風

たらぬ夜に日を足す日有花の雨

米翁老君の三周に

高宗が三年ははやし桃李  
松山の花のけむりや春の風

餅と餅と金銀皆鳴

はつ秋や嗽茶碗にかねの音

櫻嶋辨才天法樂

名月に松明もたのまぬ岩窟かな  
杏晋にくれたのもしき紅葉かな

神田明神祭禮

柿賣の遊行かたや猿のだし  
上蕨のひとり歩行や月の秋  
今下す雁は小梅か柳しき  
みの笠も草を遁ぬ野分哉  
雲の月見しやそれとも有馬筆



鵝 鴿 や芥は見へず水のうへ  
野路や空月の中なるおみなへし  
先ひと筆とくや雁のふみ

傾廊

燈籠も鶺鴒の背と代りけり  
素麺にわたせる箸や銀河  
はつ秋や心に高し空の鳶

翠流君の一周に當給ふ

川風の行て歸らぬ網火かな  
蜀黍やさしも隠せし閨の中

秋聲

蚊の背にさゝらと言て初けり

紫式部の畫の賛に

明月や硯のうみも外ならず  
乞巧羹

牽く牛のはなの穴ぞも星二つ

狸の腹鼓の畫に

うち落せ秋の夜雨のふる瓦  
野分立つ空やからすの弱法師

臘八や隠者は山に入るも有り  
うね火山耳なしやまや二た時雨  
江戸畫圖の冬田や鶴の一跨  
竹取の翁や煤の太郎冠者  
もちつきの駒のかしらや杵の先  
沾徳が手紙とどくや塩がつほ

至日

藪蔭のうめを探るや稻光

みやこどり

伐木丁

山更にひと切る音や秋の風  
豆莢の中這て居る弟かな  
樹の丈に姿見へけり秋の雨  
昔みし御花小判やけふのきく  
木兎曳きや初笑ひし輩は  
舟猿の舳先にさみし九月盡

木柵の照葉見つけし時雨哉  
傾廊

君平が占もあたらず大晦日

畫の讀に

かた足はちろり下げたか雪の鷺  
餅花や昔ながらの宮階子  
八橋やながるゝとしの墨臺  
行年や株にかゝる金もがな

江を渡て恵方参やうめ柳

ゆきみぞれつもりて梅花

夜べ捨し玉子の殻や飛胡蝶

蠶玉を祭捨たる貧家かな

起よ今朝上野の四ぞ花の雨

初午や犬に嗅れな此趣向

花礫亭の娘はつ鉄藥に

先ふくむかねは櫓はなの春  
錢賣の覗て行や朝ざくら

上巳

傾城やまづ曲水の椽に腰  
深山木を几帳にのぞく櫻哉  
鶉の花吸ひに来る夜明かな

多田薬師法樂

是は目の藥になるか花の雪  
皐角に階子わすれて春の雨

牡丹一輪青竹の筒にさして送られける時

仲光が討て参しぼたんかな  
案内子が小便したるわかばかな  
ほととぎすいたき枕に寐たよ哉  
もれ出る籠のほたるや夜這星

悼嘉魚

膝抱て誰もう月の空ながめ  
山茨や卵の花をそき垣根より  
五月雨やいつ見しまゝの淡路島

木髪が潮十と名改するに

筍やこの百性(姓)も六代め

山樵がきれ口にくしほととぎす

湯泉に立し人の噂や涼臺

羽をためす乙鳥高し今朝の秋

鶉のはし子呼也ほしの竹

此土手の馬追ひ虫や舟かふね

地にあらば二股大根天の川

中秋無月

物干の芒に雨を聞く夜かな  
十六宵や去年の日記も雨の事  
けふぞ知る鶯の愚かりの聲  
鴈も田に居馴染む頃や十三夜  
昏る日を荷ひ戻せよ紅葉賣

いつ月になりて時雨は松の聲  
其以前鯨鯨くひし人の膽  
寒菊の葉や山川の魚の鰭  
水鳥の脊中を走る霞かな

丙辰春詞

竹藪にうぐみす筍も生けり  
君が爲まくり手したり若菜摘  
人の日の粥も雪間のわかな哉  
鶯も舍那王どのやうめの肘  
藤房と正成と花ひとへかな  
三味線の名にしをひぬる薺哉

花未開

笑わせて笑ぬ花や車僧  
汐干狩比目の裏に歌書ん

草色遙看近却無

何草と見へずに青く野は成ぬ  
欸冬の水なぶりする夕かな  
往昔のお腰かけ石藤のはな

うの花や楨の柱のわれにさせ  
鶯の子は宗盛かほととぎす

詠贊狂句

彦根侍の口眞似して

さして見ろぎよやう牡丹のから傘ダ

権の本かけ

十鳥千句獨吟卷頭

うぐゐすに北野の繪馬かゝりけり  
とぶ迄を走つけたる春雉哉  
乙鳥や汲ではなせし桔槔  
ほとゝぎす鳴やうす雲濃紫  
魚狗なまこや笹をこもれて水のうへ  
田の畔に居眠る鴈や旅づかれ  
山陵の吸筒さがす夕かな  
木兎も末社の神の頭巾かな  
おし鳥のふすまの下や大紅蓮  
蒼鷹の拳はなれて江戸の色  
夕立や靜に歩行筏さし

綠樹影沈ては

仙藥を魚もなめてや雲の峰  
秋既ちかづきふへて螢がり

きぬぐの橋に成たかあの鴉  
寐やと言ふ禿まだねすけふの月  
花方に團子喰せつ今日のつき  
名月やもと塩竈の人通り  
印籠の一ッ下るやからす瓜  
貝の斑の雀に似たり夜蛤  
降り年や初茸賣りが聲の錆

重陽

太刀懸に菊一とふりやけふの床  
見劣し人のこゝろや作りぎく

冬の野や何を尾花が袖みやげ  
見し夢や時雨の松の畫から紙  
來ぬ夜鳴く銜や虎が裾模様

俊成卿の畫に

おもふ事言はでたゞにや桐火桶

河人が初七日に橋場の保元寺に

参り

松を時雨むかしうき世の鞠目附  
仙人の碁盤に向ふ巨燵かな

望白馬津

市人の喧嘩やとしの川向ひ  
麓にも手を組む松や師走山  
としの菊うち拂ふ袖のほこり哉  
行年や何を遣手が夜念佛

丁巳春興

いく度も清少納言はつがすみ  
菜の花や簾落たる道の幅  
うぐゐすぞ梅にやどかる鳥は皆  
のり初る五ツ布團やたから船  
はる雨のふり出す賽や梅二輪  
火もらひに蛇の殻や梅の畫  
出代の唇あつき椿かな  
欸冬や水のけぶりも此ごろは

ちり積て山樵が荷や花一朶

却走馬以養

はるの田や墨繪の馬の幾かへり

更衣

晋八が郵人形も拾かな  
待ぬ蚊の聲の高さや杜宇  
樹作りが衣かゝれり庭若葉  
夏山の火串は藪の紙燭かな  
板行のこれも久しきのぼり哉  
たけがはもうつ蟬も暮や五月雨

(竹河空蟬共に源氏の巻の名なり)

はつ秋や寐覺て笛の指遣ひ  
七夕の硯に遣ふ楊枝かな

秋にはたへぬと良經公の御うた

にも

月の鹿ともしの弓や遁來て  
黒樂の茶碗の欸(?)やいなびかり

かけ稻を屏風に眠る小鷺哉

寛政九年丁巳十月十八日、本願

寺文如上人御參向有しをりから

御弟子となり、頭刺こぼちて

遡るべき山ありの實の天窓哉

草の戸や小田の氷のわるゝ音  
鳴立澤にて

三千風に見付られけり澤の鳴

箱根湯泉本願住九藏がもとにと

まりて

先むすべ冬の出湯泉のわく火鉢

御隠所

冬枯や朴の廣葉を關手形

薩埵峠にて

夜山越す駕の勢や月と不二

降霰玉まく葛の枯葉かな

うつの谷峠にて

あとからも旅僧は來り十國子

汐見の觀世音に參り

あとになる潮のおとや松のかぜ

十一月十八日京藩

木屋町にて

布圍着て寢て見る山や東山

清水寺に參りて

春待や柳も瀧も御手の糸

戸奈瀬の雪を

山の名はあらしに六の花見哉

朱雀野に日くれて

島原のさらばゝや霜の聲

佐谷(屋)川にて

水鳥は流るゝ沓や橋の霜

江尻の禪寺尾奥右衛門が許にて

置巨燵浪の關もり寢て語れ

光廣卿の倭歌によりてなり

十日の夜小舟にとりのり清水の

湊をこへ、三穗の明神を遙拜し

て、絶景言葉につくされず。

いつ迄も夢は覺るな霜の舟

十二月十四日江都にかへりて

鯛の名もとし白河の旅寐哉  
ゆくとしを鶴の歩みや佐谷廻り

或年春興

うぐひすや雲水の井を水かきみ  
塩竈のあたりに煙るやなぎ哉

千づかのいね

春雨のほろ／＼和へや御もの棚  
鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉

水貝の鉢に小嶋やまつ嶋や

水無月なれば鉢扣百之丞得道し  
て空阿彌と改、吾嬬に下けるに  
發句遣しける。

其夜降山の雪見よ鉢たゝき

はつ秋や夏を見かへる和田峠

夕露や小萩がもとのすゝり宮

奉室改名春來

嶋臺の鶴と成けり茗荷の子

刈除けて鴈待つ小田の景色哉

待宵や降出す庭の捨箒

明月や曇ながらも無提燈

喚器改名朝四

いろ鳥の中によき名を鶴哉

しらぎくや籬のうちの羽林軍

龍膽や慈鎮の菊の後にさく

をり屑の堰にかゝるもみぢかな

落葉して都の見ゆる菫かな

存義先師十七回忌

ふるどを鳴て千鳥の磯めぐり

雪おれの雀ありけり園の竹

ゆきの夜や雪車に引せん三布團

一年好景須君記

口切や南天あかしうめ白し  
百兩と書たり年の關手がた

胡麻節を軒端の梅のつぼみ哉

はるさめやかるとの鬼も綱が手に

から猫や蝶囀む時の獅子奮進

人影や月になりゆく夕櫻

三月盡

ゆくはるを小塩の曲せや一と奏

老驥伏櫪而志在千里

烈士暮年而壯心不止

唾壺も四ッ迄たゞく水鶏かな

妹許の櫻煙草や十三夜

鵬の枝踏むおとや冬木だち

庚申春詞

汐擔桶は沖のかすみや波に行

讀抱朴子

首延て霞を吞か嶺のつる

ありと云ふ二王の筆やおぼる月

松を畫に昏行梅や金砂子

はるさめや筏になりぬ竹かへし

朝妻ぶねの賛

藤なみや紫さめぬ昔筆

聞そめてなかぬ夜ゆかし鵲

きりはたり提燈持も虫撰み

逢ふやいかに夜のにしきの星の竹

東陽山

紅葉見やこのごろ人もふところ手

歳暮

一文の日行千里としのくれ

平齊春興

今や俳諧蜂の如くに起り、麻の

ごとくにみだれ、その糸口をし

らず。

貞徳も出よ長閑き酉のとし

榎島參詣

さくら貝手ごとに拾へ鳥同者

悼無同

初七日に鼻くそ餅も間にあわす

名月や八聲の鶏の咽のうち

さくの宿基經見て居る主かな

會式

佛力やまだ見ぬ花のよし野紙

門(文)覺上人の院宣を持來たる

盛畫たるに

伊豆千鳥その足あとを力かな

李笠翁になるふて

一幅の春掛ものやまどの富士

井の水の淺さふかさを門すゞみ

水になる自剃鹽や雲のみね

永代橋のもとに銀鐘をあぐるとき

さし覗く顔も鴨や五兵衛舟

朝がほや花の底なる蟻ひとつ

新蕎麥のかけ札早し呼子鳥

良夜飄風驟雨

宵寐して雨夜の月は夢にみむ

露吸て蟲も千代經ん溪の菊

未白が一周忌に

ひとめぐり廻りて居るたかべ哉

月の晝うき寐の鳥をかぞへみむ

年尾

としの夜や庭火に白き犬の貌

植木屋が歳暮の梅のにほひ哉

### 潮のおと

鳥さしが手際見せけり梅林  
から傘に柳を分るいほり哉

錢湯も浅香の沼の六ゝかな  
鉞に氷を碎くあつさかな  
物申に返事のおそき暑哉  
とび移る蟬の羽赤きあつさ哉  
御赦して各々包む袴かな

### 立秋

先一葉秋に捨たるうちは哉

### 七夕

空に二ツほしきもの有り機道具  
人有や暴風のわきの中を飛ぶ筈  
いなづまや夜と晝との田一枚

旅人にかしてうたするきぬた哉  
臺笠も立傘も有り作り萩

柿島やけろりと二本休みとし  
鶴の子の額は赤き梢かな

霜葉紅於二月花

もみぢ折人や車の酔さまし

### 歳暮

ちよと鳴けとしくれ竹の庭雀

讀王充論衡

わか草や鶴の踏だる跡は皆

初子の日、長浦とゆふ所にて

松眞木も引けや若菜の茹加減

乙鳥の棚うちつけよ花のやど

是歳文化西曆春二月二十九日晋

子の百年忌たるにより、肖像百幅を畫き、上に一句を題して人人にまゐらせける。又追福の一句をなす。

轉れや魔佛一如の花むしろ  
田から田に降ゆく雨の蛙かな

護田鳥の鳴く木屋が置場や宵の月  
剖葦や燈火もるゝ夜の川  
鶯の栖む其木末とは柏餅  
さきのぼる葵の花や段階子

初職を祝ひて

蜻を餌に釣上たりな吹ながし  
やよ水鶏さいたる門を敲とは

巨闢八十賀に

突ふるせ神の切けん此藜  
賣藥が黒き扇の暑かな

かみきぬた

百舌のなく木末は昏て十三夜

曉宮如岡を悼て

露霜に手を合たる紅葉哉

箕輪石川俵口切出し給ふとき

て

軒にけふはこび手前の時雨哉

歳暮

鷹の栖む山は霞むかとし木樵

卯春興

鴨のりて氷ながるゝ春日かな

鎌田の梅見にまかりて

萬歳を居並て待つ田舎哉

はつ午やしるし斗りを揚豆腐

芹摘みに出て孫もるす彦も留主

文化丁卯春、當流の宗義、積年

の惑亂悉く御裁斷有て、二月十

八日策地御坊に召れ、關東三十

三ヶ國の御末寺、各御教受有り。

本如上人の御德義四海にあふ

れ、誠に鳥驚きぬといへるも今

此時也。

うぐひすに御堂の鼓靜也

金澤の沙干に

經緯の潮や蛸の縞このみ

漢土楊子江

日本隅田川

茶の水に花の影くめ渡し守

甲子の大黒天を讀て

月花もいさうち出さん小槌より

元木の彌陀に詣るとて

御影供の園子も花も降る日かな

卯月の八日に

珍敷ひものが咲ます垣根かな

今ひと壁答る山やほとゝぎす

落る音おとすおと有り園の梅

乞巧箋

袖ふるは廊の屋根や星の竹

牛牽て川越す人や星の宵

堀川院の御時よりとぞ

虫撰聲なきは皆うつくしき

笠脱でみな持せけり萩もどり

馬市の借屋に一と夜秋の月

雲の飛とぎれは月のみなと哉

啄木鳥みねのあらしや谷の聲

つる引けば遙に遠しからす瓜

秋雨や筏の床の夕けぶり

燕の残りて一羽九月盡

から傘を返せばもとの時雨哉

達磨忌や朴の落葉の沓片し

遠山に赤き宮あり冬木だち

鷹犬の繩に引るゝ枯野かな

時頼の寐酒を笑へみそさゝる

枯葉ゆく葱の小川や牛の繪馬

かみ置や男の肩にこぼれうめ

粥一ツくうや不喰や鉢たゝき

鶉のひと足ぬきや冬の川



歳暮

いせや伊勢今としも賣らす鏡研  
注連なはの餅さしくべつ庭竈

春興

見て笑へ若菜の蘂に天下筋  
師遠が苔をひくやけふの松

墨子悲絲

そめやすき人の心やいとさくら  
錢突て花に別るゝ出茶屋かな  
かね撞ぬ撞(鐘)樓有けり夕さくら

瑞麟寺をよぎる

ゆきとのみいろはに櫻ちりぬるを

ほろ峠の山かけ忍べほとゝぎす  
堂二丁先をゆく帆や麥の浪  
山寒し瀧より下の蟬の聲

初茸や廻さは獨樂にまわるべく

屑買ひの吹れて歩行野分哉

海山と名の立分る角力かな  
秋雨やそれは降る鳩晴る鳩

東陽精舎にまかりて

地に敷や佛の場の天竺花

はつ鴈やはつかの闇に聲は月

龜貝判者披露

隱家は同じはちすの垣根かな

名月や洋に見なれぬ獸あり

芥川わたるところ繪たるに

抱かれたり負たり風の萩すゝき

いぎたなき隣も有を飼うづら

橘千蔭身まかりける。斷琴の友

なりければ

から錦やまともに見ぬ鳥の跡

吾齋る菊に讃なしかた月見

山茶花や根岸尋る革文筥

しぐるゝは鶯の羽影や冬の海

きぬぐのふくら雀や袖頭巾

神名川に旅寐して

さまぐの鳥を千鳥と聞夜かな

和田海の底もにしきや冬さかな

歳暮

我かどに松負脊せ馬やとし儲

市人の天狗礫や土のかね

春興

難波津の習ひ始やうめの花

うぐひすの週音笑ふや垣の梅

初午や二ツ瓶子の黒羽おり

二月二十五日鞠場が庭の菅廟に

て、はるかいもよふしける。

一順をつけよ蛙もうぐむすも

花見ても依怙ある人のこゝろ哉

島うちをよくも反る也老が身を

己巳四月江の嶋辨才天三社敷開

輓有ける時

扇にて扉ひらくや狂言師  
八專に明るき麥の田一枚

かさゝぎの橋場を渡れ星迎  
いなづまやしはし明るき椎が本  
名月や筆法居士が露の不  
二車井の音や雲井の渡り御

小夜千鳥未だ寝ぬ船の咄聲  
水鳥や行あたりては右左

花ぬふとり

己巳の冬、居を藤緑といふとこ  
ろにうつして

取遣りもおかしき村の歳暮哉  
節季候は百轉(囀)のはじめかな

元日の朝寐起すや小田の鶴

うめ守に硯借れば筆もなし  
山蔭の梅まだ寒し活大根

うぐゐすや梅に氷れる枝もなし  
梅を縫ふ糸ならなくに春の雨

桃洞に送る 別巻有草

この道の手綱ゆるすや春の駒

朝三いつのときか予と京師に遊

ぶ。ことし又心牛にいざなはれ

て花洛にをもむく。その饒して

當て來よ大和路かけて二の替り

鳥一ツ梭を投たりいとさくら

讀仙經

朝々の洗ひ流しや蜂に成れ

小田返す初いなづまや鉄の先

人曆忌

ちる花やあまぎる雪の鍋鑄かけ

文臺之銘 別巻有草

しら魚や是も居枕の橋柱

花に飽て机にねむる胡蝶哉

佛生會

生れ出てうき世の花の一御堂

なま鯛や先綿をぬけ更衣

たゝかすに水鶏の入や戸なし庵

竹降日

よひさめて竹もる月や十三夜

ゆふ立の今降るかたや驚一羽

山梔子の花を相手や世捨いほ

七夕

かさゝぎとけふは呼るゝ鴉かな

晝寐して晚待星を顔に筈

十三夜

熱燗をふくや後の月の松

店賃のかりも結ばず九月虧

野州旅行

問ひ來かし覆の紅葉地藏堂

山川のいわなやまめや散もみぢ

未春興

今朝解くや氷のわか菜霜の梅  
鵲の來て豆煮おとや二日灸

三冬雪なし、睦月十七日雪ふる。

刈らでけふ雪待つけぬ庭の萩  
鳥追の足袋の白さや川向ひ  
人の氣のほころび初つはつ櫻  
干海苔に小海老見付て哀也  
をきふしも竹の自在や梅の花  
榎見へ白壁見へてかすみ哉  
芹賣れてさみしき鶯の栖哉  
初燕くるふよふなり袖袂

江戸節一曲をきゝて

紫陽花や田の宇盡しの濡ゆかた  
ほととぎすなくや有馬の火見番  
毛虫今蜘蛛のふるまひ杜宇

ほととぎす猪牙の布團の朝じめり

住吉をどりの畫の讀に

ふけや此すみよしの風うちはより

魚一ツ花野ゝ中の水溜り  
百舌鳥の尾のふる里寒し稻ぼつち

鼠とる猫、鳥捕る鷹、みなこれ

世上のありさまなり。

草の戸に蠅扇をながめけり

宇治の里一見の時

いな妻や二度にみせたる寺と橋

葉月十五夜寒光洞にて

十六宵も獅子の氣遣りか廓の月

名月に御歌所も覗きたし

藤澤にて

人知らでうけらの花の盛りかな

榎島法樂

すげ笠の月と時雨や山ふたつ

うめの立枝

客船に入日残して時雨かな  
傘はまだ時雨るゝ音や星月夜  
からゝと日本堤の落葉かな

至日

今日よりして春の歩行や日の鴉  
餅花や柳さくらを一本にて

歳暮

大名は鸚鵡に似たりとしのくれ

壬申春興

梅わか菜皆よしゝや庵の春  
うぐひすの舌うちしたり花の味  
紅梅や今朝は未だ來ぬ白すゞめ

人日

ふるとしのふる名は呼ぬ鈴菜哉  
うぐひすや今谷を出て身づくろひ

む月十七日杉田にあそびて

解き舟の橋を境やうめの華

これはく爰をや梅のよしの山

上巳

居候夜着の洞出て桃のはな

すみだがはの花見にゆきて

遅りやいかに張良朝ざくら

蜘蛛の園に暫く花も舞ふ小蝶

苗竇りに初音問ばやほととぎす

圓覺寺にまかりて

鐘涼し女の力聞へけり

權田坂と言ふ處にて

ほととぎす楓花咲く山路かな

維摩經をよみて

解脱して魔界崩るゝ芥子の花

青樓草市

市分てもと言ふ花やをみなへし

新蕎麥や一とふね秋の湊入り

はつ葺や苔斗りの小むらさき

啼く山の姿も見へつ夜の鹿

良夜

名月や何に似たるぞ鍋の蓋

炮焙に何ふすぶるぞ秋の雨

趁浪を追かけて刈るすすき哉

魴魚釣りや蒼海原の田うへ笠

みねとなり渚と成るや秋の雲

山紅葉照るや二王の口の中

又もみぢ赤き木間の宮居かな

みの虫や啼ねばさみし鳴くも又

歸去來

歸なむ居酒一と口菊寂ぬ

春興

うぐひすの口明く影や下地窓

梅白し眞の手桶の星月夜

こもぼれても若菜の土や二疊臺

む月二十五日、下谷源空寺の御

忌にまかりて

圓なる春の光や江戸の御忌

うぐゐすに糸針借む梅の宿

正月四日南岳禪師身まかりける

よし、門人寛柔が書狀といきけ

るに

春雨にうちしめりけり京昆布

初午や霜解道の竹いかだ

新梅莊満開

朝飼かう鶴もまだ來す梅の宿

終日花を詠て落日にいたる林

魔士之家か。

うめ暮て歸る鶴待つ端居かな

李太白

小閑波を歩行て取む春の月

葛城とゆふ諸曲、一聲一張をう

けたまわりて

聞け春の夜の月白し梅しろし

詩骨牌に女もひとり春の雨

二月二十八日、駐春亭以一が利  
休忌にまかりて

竹葉にかすむ一間や無盡燈  
狗子のころび歩行や花の雪

蕪雲山にまかりて

暮の雉子鳴く度に散る櫻かな

三月二十三日夜、隅田川をわた  
り花を見る。歸路八百屋葺四郎

がもとにて

行春の袋比目や餅がつほ

卯月九日板島參詣とて立出ぬる

に

川崎を蜂の飛ぶ日や女旅

宮塚にて

百貫目の長持ふるや若葉山

神奈川はね澤屋にて

天に有らば干鰯のなりや杜鵑

八十の賀に

先づ祝へ八千代の春の椿餅  
掴む手にあまる螢のひかり哉  
夏山に何射弓ぞ弦のおと

高野山蓮華衆院を招じて

墓ものも包ぬ草のいほりかな

三又江舉銀鱸

いざ月に願かぞへむ活けすゝき

肴核既盡て樓船に藝子只二人

打水に目通ゆるす下部かな

なでしこや呉服穴織が手のすさみ

ふみ月三日木釜が身まかりぬる

を聞て

波羅密の舟にもがもな桐一葉

敏行が驚れぬる三日の月

柳屋安五郎、さごしとゆふ魚を

送る時

暑さにもさわらぬよしの見舞哉

遊百花潭之水樓

折琴よ繼三味線よすゞみぶね

ふち袴誰にひかれてほころびぬ

青樓八朔

仕附亭の残る暑や節小袖

葭葦簾に蝶のはさまる野分かな

八十六翁巨圓身まかりぬる時

仙境の新酒呑にかいなれける

良夜

名月や尻うちたく十寸の駒

文化十癸酉年夏六月、西洋商船

載南粵巨象來、將貢江府。故有

不受、却異邦。

狹ひやら象は南へかへるかり

重陽

園の中の星にしたむや菊の酒

十三夜の月を見むとて、人々の

そゝのかすにまかせて、玉河わ

たりに杖を引て

月の今日入べき山や稻ぼつち

武藏之野無山鳥。月出於草入於草。明萬曆中之人農丈人と  
言ものゝ詩なり。めづらしければ其意もてうける也。

栗焼て雨占む十三夜

うつおとは罌の豆腐もきぬた我  
懸魚やかけてぞたのむ罌網  
山蜂に乳房吸るゝ葡萄かな  
飛そうなからす驚しや柿畠  
駒形の碑を摺て來よ草の花

千兩で賣るか小倉の初しぐれ

達摩忌

如何なれば祖師さいの目の納豆汁  
藏經に目の引渡る長夜かな

十夜

種冬瓜汝も法然天窓かな

日蓮忌

山ざくら昔しなからの吉野紙

惠比須講

下戸も一ッうけて三郎をびす講

ぬくめ鳥明ればこぼす湯婆哉

芋頭葺や落せし酉の市

帛は無か獅ゝはいかにや獸店

沽む哉花屋が室の玉つばき

持ながら雀を折む雪の竹

洗硯魚吞墨

わか鮎やすぐりを洗ふ流にも

煮茶鶴避煙

つる高き松の木蔭や花見茶屋

卜部に送る  
前書者

鴈金は燕にかへし申候

甲戌春興

若菜ひく女も鶴の歩行哉

羽子の子や梅にとまれば呼子鳥

笈ゆく跡又白しうめの影

七種のうち揃たる田舎かな

はる雨に濡て戻し女貓哉

隅田川梅屋にて

默禮の思ひ出されず梅の道

藥王寺のうめを

枝垂梅彼岸ざくらに後向き

洲蛤月頭には西に有り

うら人が握拳の榮螺かな

涅槃會

ヨ、にふる佛の道や春の雨

西行忌

其衣更着の餅草を團子哉

石濱にゆきて東岸の花を見る

帆が隠し帆が見せてゆく櫻かな

口明て鳴や燕の子安貝

三月五日隅田川の花を

驥驥の布引く花の堤かな

駐春亭利休忌に

螻蛄刻のうごくよふなり春の雨

待とても花にねぬ夜はなきものを  
ほとゝぎすいかに難面き笄枕

う月十八日古筆了意が宅にゆき  
ける時、岩倉三位殿不二の山見  
むとて、忍びて吾嬬に下り給ぬ  
とて、立よらせたまうに不計謁  
見して

岩倉のしのび音もれつ時鳥

御かへし

三位殿

山寺の青葉がくれのほとゝぎす

きく人がらに聲ぞそへぬる

夏草や深き思案の莽の主

小金花龜住む池の玉藻かな

楞嚴經

摩登伽が化粧崩るゝ芥子の花

淺草人丸堂建立の時

俳諧師等も雪と見るさくらかな  
席の子の乳のむ音や苔清水

悼白賀

朝がぼや瑠璃の世界に人は今朝

此花莫遣俗人看 新染鶯黃色未乾

好逐秋風天上去 紫陽宮裏要頭冠

舞ひ人の冠に似たりねりの花

大庭や冢の床有萩すゝき

青樓俄狂言番組

影は空にすみよし踊けふの月

荒神の繪馬かけるあふぎに

鼻聲の御釜拂や秋の蟬

鶉鴒や又來ては尾をふる井筒

さして行から傘白し初時雨

初氷うつりにけりな妹が顔

尾頭をいざ言問む海鼠うり

遠千鳥弓矢の沙汰もなかりけり

文晁が畫ける山水のあふぎに

夕ぐれや山になり行秋の雲

初雪や椽に小鳥の足のあと

至日

子を申聲も春めく冬夜哉

鶴の割る氷のおとや朝ぼらけ

善男子善女人御講參や西ひがし

戌歳暮

行や年すは煤竹の伏見町

節季候や竹の林の羣すゝめ

市人や雪に頭巾のひた兜

餅花やほこりの見ゆる朝掃除

煤膽橘柑の乾はきくの花

金杉も餅搗唄に靡咲し

畫の讀に

釣上た鯛よ小判よとしの市

菫雲樓にて

傾城のふくさ捌きや大晦日

松と梅折かけ垣の竹の障

去年甲戌の秋の頃より替者春雪

と言ものゝ謎く流行して江都

に喧し。

去年かけた謎は解たり春の雪  
程ヶ谷に駕乗捨つ梅の花  
うぐひすにほゝう日の出る山路哉

阮箴が三味線は晋子に聲をかけ

られ

鶯や摺 小木しばし朝朗  
はるさめや更て笥に入石のおと

二月十七日追福秋香菴集兆

名は残る棟の實の木ずへ哉  
蒼蠅の糞して行ぬ白牡丹  
うめ散て鶯草白き木蔭哉  
蛤のにじりながらや遠干潟  
田の畔に花見て歸る鴈も有

笹住の里に蛙合戦ありとて人々

まかりける

車前子<sup>おほこ</sup>に手負ひを荷ふ蛙哉

九草のもとより初經送ける

魚の脊に鎌倉山の青みかな

その一ふしを龜田先生へ送けれ  
ば

鵬齋

初がつは一句も出ぬうまみかな

勅をうけて切かねて居る牡丹哉

ふみ碎く蝶の力や芥子の花

静養庵を訪ふ。座いまだ温なら

ずして蕎麥を出す。其味奇々、

更科をそしり栗山を笑べし。

うつに曳く涼しき浪の勝手かな

およし婚禮を祝て

やよすゞし夏も屏風の蝶番ひ

仁徳の御製にもれぬ蚊遣かな

風呂敷の日除も涼しみそぎ舟

乞巧箋

をり姫の織屑飛や星の歌

秋に先仕たり新蕎麥新豆腐

かけぼしの唐繪に似たりくれのをも

啄木鳥に日暮残る木末かな

初鶴や晴れば見ゆる無人島  
葦の間の一ト時あつし夜半の虫

良夜

名月や引ふくらめし五人張

いさよひやいさ清見がた田子の浦

浅茅が原の松間を過とて

玉姫のたまゝ見せつ月の顔

初廊を開て

さへかえる余蔭の木瓜かりの聲

八月廿日、弘福寺の普茶に罷て

風子恵良に謁す。玄關の左右、

木樨の大樹二本あり。

蚊子鐵牛何有分別

木樨や金銀の香を悟り不得

東陽山

賢を賢として色にかへでの紅葉哉

上野清水にて

舞臺から短冊の飛ぶ紅葉かな

髮置を祝て



冬の田に鶴脛長し飴ぶくろ

至日

むりやりに咲や一鉢冬至梅

古田高麗の茶盤を畫にうつし、

其上に讀しておくるとて

幾時雨ふるやふる田のかたみ哉

東叡山の清水に

如意輪の頼杖したる落葉かな

水却て炭を斗るやかたし貝

石路いそぎの日蔭は寒し猫の鼻

獺良の崩れ次第や冬の川

歳暮

塩魚に正月ちかき日ざしかな

いざ珠を拾んとしの浦傳ひ

抱一上人春秋の發句有り、草稿五車に積べし。其十が一を舉て  
一冊とす。上人居を移事數く也。其部を別に其處を以す。これ  
皆丹青圖繪のいとまなり。此冊子の跋文を予に投ず、尤他に讓  
べきにもあらず。唯寛文延寶の調を今の世にも弄もの有らば、  
其判を乞んと。是上人の望給ふところ也。春來窓、三叉江の  
ほとりに筆を採畢。



跋 圖

覃抱一隱君を

識る蓋し三十

有餘年。隱君

の操。終始一

の如し。性誹

諧を好み。圖

畫を善くす。

覃誹諧なる者

を知らずと雖。

其の畫の日に

進むを觀て。

又誹諧の韵。

響宮商に中る

を知る。古云

ふ。詩は有聲

の畫。畫は無

跋



覃識抱一隱君蓋三十有  
余年。隱君之操。終始如一。性  
如誹諧。善圖畫。覃雖不知誹  
諧者。觀其畫之日進。而又如  
諧語之韵。響中宮商矣。古云。

附

技。可以消日矣。若夫庖丁之

に全手なし。  
陳平の肉。天  
下を宰割する。  
果して何の益  
ぞ。龍か々々。  
屠つて珠を獲。  
覃の如き俗吏。  
其の鱗爪を希  
ふも。亦得可  
らざるのみ。  
文化癸酉清  
明の後日。  
南畝覃繡林  
樓中に書す

南畝

刀。日無全牛。陳平之肉。宰  
割天下。果何益矣。龍乎々々  
屠而獲珠。如覃似吏。希其  
鱗爪。亦不可得已。  
文化癸酉清明後日南畝覃  
繡林樓中

